

タイトル	報告 大学生による心理学体験授業を通じた地域児童・生徒との教育的交流 - 豊富町における地域連携の実践報告 -
著者	進藤, 将敏; SHINDO, Masatoshi
引用	開発論集(117): 1-8
発行日	2026-03-13

大学生による心理学体験授業を通じた 地域児童・生徒との教育的交流

—— 豊富町における地域連携の実践報告 ——

進 藤 将 敏*

1. 豊富町における教育課題

北海道・豊富町は、広大な自然環境や農畜産業などの豊かな地域資源に恵まれている一方、全国的な傾向と同様に人口減少と少子高齢化が進行している。とりわけ年少人口の減少は、地域社会の担い手不足を通して、学校・家庭・地域の教育機能の維持に影響を及ぼしやすい。人口規模の縮小は、教育資源（人材・機会・ネットワーク）の確保を難しくし、結果として、子どもが多様な刺激に触れる機会の減少や、外部との接点の希薄化をもたらし得る。

豊富町の行政計画においても、子育て・教育に関わる課題は繰り返し位置づけられている。たとえば、町の中長期計画である「第5次豊富町まちづくり計画」（計画期間：2019年4月～2028年3月）では、少子化を背景として妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援や、安心して子育てできる環境づくりの重要性が示されている。また、「豊富町こども計画」（令和7年4月）では、核家族化や地域のつながりの希薄化、子育ての不安・孤立感など、子どもを取り巻く環境の変化を踏まえ、地域全体で子育てを支える方向性が掲げられている。さらに、人口減少を前提とする「豊富町過疎地域持続的発展市町村計画（令和3年度～令和7年度）」や「第2期豊富町まち・ひと・しごと創生総合戦略（令和3年3月）」は、地域の持続性の観点から、外部との連携や人的資源の確保・循環の重要性を示唆する枠組みとして参照できる。

教育的に見ると、人口減少地域では次のような連鎖が生じやすい。第一に、子どもが接するロールモデルや他者との交流機会が限られ、学びの視野が狭まりやすい。第二に、学校外活動や地域行事が縮小し、非日常的な学び（新規性のある刺激）が得られにくくなる。第三に、大学・専門機関と接点を持ちにくく、学問や進路に関する見通しを広げる機会が不足しやすい。これらは単に「イベントが少ない」という問題ではなく、子どもが自分の世界を更新していくための“学びの循環”が弱くなることを意味する。加えて、学校現場は限られた人的・時間的資源の中で運営されており、外部人材との協働によって「子どもの学ぶ意欲を高める新たな刺激」を導入する必要性が高まりやすい。

以上より、豊富町における教育課題は、学校内部の改善のみで完結しにくい構造的条件（人

*（しんどう まさとし）北海学園大学開発研究所研究員，北海学園大学経営学部准教授

口規模・交流機会・外部接点)と結びついている。したがって、地域と外部がつながりを持ち、子どもの学びに“新しい入口”をつくる実践は、教育行政が掲げる方向性とも整合し得る。

2. 大学と地域の協働の位置づけ

上記の背景のもと、北海学園大学と豊富町は2021年以降、地域教育支援と実践的学習を目的とした「地域連携による教育実践」を継続して進めてきた。本事業は、単なる訪問や行事支援ではなく、(1)地域の教育課題を共有し、(2)大学生が教育活動を企画・実施し、(3)現場経験を通して大学生が学修内容を再構成し、(4)継続的な協議と改善を通して地域の教育力向上に寄与する、という“協働の教育モデル”として捉えられる。

特に本稿が焦点化するのは、大学生が主体となる教育活動が、地域の子どもに対して学びの刺激を提供するだけでなく、大学生にとっても、自身の知識を「社会の文脈で伝える」経験を通じた実践的学習となり得る点である。大学生は専門職ではないが、だからこそ子どもにとって近い未来のロールモデルとして機能しやすく、対話的で参加しやすい学びの場を形成しやすい。ここに、人的交流(教育的交流)を核とする地域連携の意義があると思われる。

3. 本稿の目的

以上を踏まえ、本稿の目的は次の3点である。(1)大学生による地域の子どもを対象にした心理学体験授業の実践(大学生と地域児童・生徒との教育的交流)について報告する。(2)その実践を通じて大学生に生じた変化を捉えたいうえで、地域連携がもたらす教育的・社会的意義について検討する。(3)教育を軸とした地域連携を継続可能な形で展開するための課題を提示する。

特に、人口減少地域における「外との接続」と「学びの循環」を再構築する上で、大学生という外部人材との教育的交流がどのように機能しうるかを明らかにする。

4. 大学生による心理学体験授業の実践について

4.1 実施概要

北海学園大学経営学部所属する大学生12名が主体となり、豊富町立兜沼小中学校において心理学の体験授業を実施した。実施日は2025年8月25日であり、児童・生徒の発達段階に応じて内容を調整した上で、約30分間の短時間プログラムとして構成した。授業は学年別小集団で行い、大学生が児童・生徒の近くで対話を重視しながら活動を進める形式をとった。

4.2 学年別の内容

(1) 小学校低学年（1・2年生）／中学年（3・4年生）：錯視の体験

低・中学年では錯視を題材とし、「同じ長さ・大きさでも違って見える」現象を教材で確かめた。ねらいは、知識を教えることよりも、「見えたものが常に正しいとは限らない」という心理学的視点に触れ、子ども自身が驚きや疑問を言語化することである。大学生は説明役に固定されず、子どもの反応を起点に問いかけを行い、子ども同士の見せ合い・話し合いを促した。



図1 錯視教材を用いた体験授業（上：1・2年生，下：3・4年生）

(2) 小学校高学年（5・6年生）：フレーミング効果の体験

高学年では、同じ内容でも「言い方」によって受け取り方や判断が変化するフレーミング効果を扱った。日常的な選択場面を例に、表現の違いが気持ちや判断に影響することを体験的に理解できるよう構成した。ねらいは、言葉の働きを「知っていること」として終えるのではなく、実感を伴って捉え、他者理解やコミュニケーションの視点へ接続することである。



図2 フレーミング効果の体験授業

(3) 中学生：性格理解（Big Five）

中学生ではBig Five理論に基づく簡易的な性格理解の活動を行った。自身の傾向を知ることによって自己理解を促すと同時に、他者との差異を受け止める視点を導入することをねらいとし



図3 性格理解（Big Five）の体験授業

た。大学生は「診断」にならないよう留意し、結果の優劣ではなく、違いを説明し合う対話に重心を置いた。学問としての心理学に触れ、自分や他者を捉える言葉を獲得する入口として位置づけた。

4.3 実施上の工夫

いずれの学年においても、大学生は「正解を教える」立場に固定されず、児童・生徒の反応に応じて問いかけや説明を調整しながら活動を進めた。これにより、子どもにとっては参加しやすい体験型学習となり、大学生にとっては「伝える難しさ」や「子どもの反応に合わせて柔軟に対応する感覚」を学ぶ機会となることを意図した。

4.4 大学生への質問紙調査

本稿では、心理学体験授業を通して大学生にどのような変化が生じたのかを把握するため、授業実施前後に質問紙調査を行った。調査は量的項目と自由記述で構成した。

量的項目：教育活動や地域との関わりに対する意識、および自己認識に関する次の6項目を設定した。「1. 子どもの教育活動への興味」「2. 地域貢献活動への興味」「3. 自分の知識を他者に伝えることへの自信」「4. 子どもに柔軟に対応できるという自信」「5. 仲間と協力して活動することへの自信」「6. 地域文化を理解したいという意欲」のそれぞれについて、「1：全くそう思わない」～「5：とてもそう思う」の5件法で回答した。

自由記述：自由記述では、数値では捉えにくい経験の質的側面を把握することを目的として、次の3点について記述を求めた。(a) 授業を通して印象に残った子どもの様子、(b) 地域や地域の人々に対するイメージの変化、(c) 今回の教育活動を今後どのように活かしたいか。

5. 結果と解釈

本稿では、質問紙調査の事前・事後比較（表1）および自由記述の整理（表2）を通して、大学生に生じた変化を検討した。

表1 心理学体験授業の実施前後における大学生の自己評価の平均値（5件法）

質問項目	1	2	3	4	5	6
	子どもの教育活動への興味	地域貢献活動への興味	自分の知識を伝える自信	子どもに柔軟に対応できる自信	仲間と協力する自信	地域文化を理解したい意欲
事前	3.92	4.08	2.33	3.75	4.50	4.25
事後	3.67	4.00	2.42	3.92	4.42	4.08

表1について、項目によっては上昇・維持・わずかな低下が見られたが、全体として重要なのは、単純な「意識の高まり」というよりも、実践経験を通して教育活動や地域理解に関する

認識が具体化・再構成された点である。例えば「子どもの教育活動への興味」や「地域文化を理解したい意欲」がわずかに低下した項目についても、自由記述には「想像以上に難しかった」「短時間では地域を理解しきれない」といった含意が読み取れ、理想化された見通しから、経験に裏打ちされた現実的理解へ移行した可能性が示唆された。一方で、「子どもに柔軟に対応できる自信」は上昇しており、年齢差や反応の違いに直面しながら授業を進めた経験が、自己効力感の形成に寄与したと解釈できる。

表2 大学生による自由記述の主な内容とカテゴリー分類

カテゴリー	内容の特徴	代表的記述例（要約）
①子どもの姿への再評価	子どもの理解力・態度への驚き	「低学年でも集中して話を聞いていた」 「補助がなくても取り組んでいた」
②教育する側としての自己省察	教える難しさ・工夫への気づき	「伝え方の重要性を実感した」 「準備の大切さに気づいた」
③地域へのイメージ変容	地域観の更新	「自然が豊かで人が温かい」 「都会とは違う良さがある」
④人的交流の価値認識	人との関わりの意味	「人と関わることで学びが深まると感じた」
⑤将来・学びへの接続	今後への意欲・展望	「今後の学びに活かしたい」 「挑戦する姿勢を持ちたい」

表2について、自由記述の内容は（1）子どもの主体性や理解力への驚き、（2）教える側としての振り返り、（3）地域への印象の変化、（4）今後に向けた展望、などといった複数の観点に整理された。ここから、大学生は子どもを抽象的な存在としてではなく「学びの主体」として捉え直し、同時に自身の伝え方・準備・関わり方を省察する視点を得ていたことがうかがえる。以上より、本実践は人的交流を基盤とする地域連携教育として、学生の学びを促進する機会として機能していたと考えられる。

6. 今後の課題

本実践は、大学生が主体となって心理学体験授業を実施し、地域児童・生徒と直接交流することで、子どもに新たな学びの刺激を提供すると同時に、大学生に対しても教育実践の省察を促す機会となった。一方で、教育を軸とした地域連携を「継続可能な取り組み」として定着させるためには、少なくとも次の3点が課題となる。

課題1：人的交流を単発で終わらせない仕組みづくり

最も重要な課題は、教育的交流を単年度・単発の取り組みに終わらせないことである。行政計画が掲げる子育て支援・教育環境の充実は中長期の取り組みであり、短期のイベントのみで

は成果の蓄積が難しい。そのため、大学側では本実践を正規授業・演習・PBL等に位置づけ、参加学生が年度をまたいで関わりやすい導線（単位認定、活動履歴の可視化、後輩への引き継ぎ資料の整備など）を整える必要がある。地域側でも、学校・行政・大学が定期的に協議できる枠組みを持ち、次年度の改善点を共有しながら継続する体制が重要となる。

課題2：大学生の活動を「地域の教育資源」として位置づける認識

本実践で大学生は、教える難しさを実感しつつも、子どもの反応に応じて関わりを調整する経験を通して学びを深めていた。ここで重要なのは、大学生を単なる「お手伝い」や「ゲスト」にするのではなく、学びながら教育活動を担う人的資源として位置づける視点である。子どもにとって大学生は、近い将来像を具体化しやすいロールモデルになり得る一方、大学生自身にとっては、学問知を社会に接続する訓練の場となる。行政が重視する地域ぐるみの子育て支援や多様な交流・体験機会の観点からも、大学生が継続的に関与するモデルは親和的である。

課題3：教育的成果を「見える形」で共有し、継続判断に資する情報基盤をつくる

継続性を左右する実務の要点は、成果が「語れる」「共有できる」「改善に使える」形で蓄積されることである。本実践では質問紙調査と自由記述により学生側の変化を捉えたが、今後はこれに加えて、学校現場の所感（教員コメント）や、子どもの反応の記録（観察メモ等）を簡便な形式で残し、年度ごとの改善に接続することが望ましい。

行政施策は理念だけでは動きにくく、継続の判断には「何が得られたか」「次に何を变えるか」が必要となる。大学・学校・行政が共通のフォーマットで成果を共有することは、教育環境の充実を抽象的方針にとどめず、実践として積み上げていくための基盤となる。

7. 今後の展望

今後の地域連携において重要なのは、教育を軸とした人的交流を、地域の中に埋め込む視点である。大学生・地域児童生徒・学校・行政が関わる構造そのものが、人口減少地域における「外との接続」と「学びの循環」を補強し得る。継続的な展開によって、子どもにとっては学びの選択肢が広がり、大学生にとっては実践的学習の場が確保され、地域にとっては教育力と人的ネットワークが蓄積されるという好循環が期待できる。こうした循環を現実のものとするために、前節の課題を踏まえた制度設計と運用改善を重ねることが求められる。

なお、本稿は北海学園大学開発研究所の総合研究「北海道の地域構造と社会課題・地域政策に関する総合的研究」（2024年～2026年）における豊富町プロジェクトに関連してまとめたものである。

8. 参考資料

豊富町（2021）『第2期豊富町まち・ひと・しごと創生総合戦略』令和3年3月。

（豊富町公式 PDF）<https://www.town.toyotomi.hokkaido.jp/section/soumuka/foqo6q0-000000hps-att/foqo6q0000000idj.pdf>

豊富町（2021）『豊富町過疎地域持続的発展市町村計画（令和3年度～令和7年度）』。

（豊富町公式 PDF）<https://www.town.toyotomi.hokkaido.jp/section/ufvuj50000004qth-att/n7nggm0000000h7p.pdf>

豊富町（2019）『第5次豊富町まちづくり計画（2019年4月～2028年3月）』。

（豊富町公式ページ）<https://www.town.toyotomi.hokkaido.jp/section/soumuka/lepd6s00000098xj.html>（参考：関連 PDF の一部：基本計画 P35-P53）<https://www.town.toyo-tomi.hokkaido.jp/section/soumuka/lepd6s00000098xj-att/lepd6s0000009925.pdf>

豊富町（2025）『豊富町こども計画』令和7年4月。（豊富町公式 PDF）<https://www.tow-n.toyotomi.hokkaido.jp/section/chominka/jroe7b0000000pp2-att/jroe7b0000000pri.pdf>